

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 17 日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2011～2014

課題番号：23652094

研究課題名(和文)生成文法による日本語方言の統語論研究

研究課題名(英文) Syntactic studies of Japanese dialect from the point of view of generative grammar

研究代表者

本田 盛 (Honda, Masaru)

関西学院大学・総合政策学部・教授

研究者番号：30132319

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では方言変異が基本的には言語一般で働いているメカニズムと同じものによって作り出されるという仮説にもとづき、どのような統語的性質が方言変異を生み出すかを明らかにしようと試みた。実証研究として、奄美大島の喜界島で話されている喜界語をとりあげ、分析をおこなった。その結果、補文標識削除、N'削除、格パターンが方言変異を生み出す上で、重要な役割を演じることがわかった。言語間の差異と微少差異はそれほど大きく異なるものではなく、言語間差異をあらわす規則や原理は同時に微少差異である方言変異にもはたしているというメカニズムが考えられる。これによりより説明力の高い言語理論の構築が可能となるであろう。

研究成果の概要(英文)：The present research focuses on the idea that dialectal differences fundamentally involve the same syntactic mechanisms as found to work in language in general, and attempts to identify what syntactic properties contribute to dialectal variation. As empirical research, the present research investigated and analyzed the Kikai language spoken on Kikai Island in Amami. As a result, it turned out that Complementizer Deletion, N'-Deletion and Case patterns all contribute to language variation. Syntactic mechanisms behind them have not been fully identified, but this way of research should lead to a more articulated theory in which micro-variation and macro-variation do not differ essentially in that the rules and principles isolated for macro-variation are also responsible for micro-variation.

研究分野：言語学・生成文法研究

キーワード：生成文法理論 統語論 日本語方言変異 喜界島

1. 研究開始当初の背景

近年ヨーロッパを中心にして、近接言語並びに方言のマイクロパラメータ研究が活発になってきている。異なった言語系統に属する言語の対照比較ではなく、同一の言語系統に属するとされる諸言語、あるいは同一言語の方言と呼ばれる変種を比較することにより、これまで明らか

にされなかった言語の構造的特性や格付与、移動現象などの詳細な性質が明らかとなりつつあり、言語の普遍的原理の解明も期待されている。

日本語においても、従来の社会言語学的方言研究に加えて、マイクロパラメータ研究が必要であることを痛感した¹。本研究では、ケセン語を対象として、マイクロパラメータのアプローチによる分析研究を行う。ケセン語を対象とする主な理由としては、この言語が山浦(2000)によって詳細に記述研究されていること、学術的に確認はされていないが、アイヌ語との接触も考えられ、言語系統的にも興味深いことがあげられる。

2. 研究の目的

ヨーロッパを中心とした生成文法理論に基づいた言語変異研究のアプローチを日本語方言研究へ応用する可能性をこれまで探ってきた。そして日本語においても、従来の社会言語学的方言研究に加えて、マイクロパラメータ研究が必要であることを痛感した。本研究では、ケセン語を対象として、マイクロパラメータのアプローチによる分析研究を行う。ケセン語を対象とする主な理由としては、この言語が山浦(2000)によって詳細に記述研究されていること、学術的に確認はされていないが、アイヌ語との接触も考えられ、言語系統的にも興味深いことがあげられる。

3. 研究の方法

先行研究としてヨーロッパおよびアメリカ合衆国で生成文法の視点から多くの理論的および実証的研究がこれまでおこなわれてきた。

本研究ではこれらの先行研究、およびヨーロッパ、アメリカ合衆国の研究者との研究交流から、言語変異のメカニズムには言語

¹徳川宗賢 / 平井昌夫 (1969)、徳川宗賢 / W・グローター (1976) など。また生成文法の視点からの日本語の通時的研究は優れたものがある。Aldridge (2015)、Yanagida and Whitman (2009)、金水 (2005) など参照。

一般にはたらく原理や構造的特性がかかわっており、補文標識、N^o-Deletion、格のパターン(対格、属格、主格)などが方言変異と関係することを発見した。

当初実証研究の対象として東北地方大舟渡市を中心に使われている「ケセン語」をあつかう予定であった。そのおもな理由は「ケセン語」が山浦(2007)によって詳細に記述されていたからだ。しかし2011年の東日本大震災によって現地在が壊滅的に被災し、復興までの期間、現地調査が難しい事態となり、対象地域を変更せざるを得ない状況となった。そのため、方言調査の地域を奄美大島の喜界島に変更し、2014年9月に現地調査をおこなった。

現地調査は2014年9月に喜界島でおこない、理論研究における仮説に基づいて調査をおこなった。

4. 研究成果

1. 生成文法理論と方言研究

ヨーロッパでは、ドイツ語およびオランダ語、イタリア語を中心として、方言変異と統語構造に関して多くの理論および実証研究がおこなわれてきた²。これらの研究の中で、特に従属文の主語が補文標識と動詞の両方に一致する、Complementizer Agreement は方言変異と関連が強いことが示されている。Carstens (2003) は次のような例文をあげている。

- (1) a. Kpeinzen dan-k (ik) morgen goan.
I-think that-I (I) tomorrow go
'I think that I 'll go tomorrow.'
b. Kpeinzen da-j (gie) morgen goat.
I-think that-you (you) tomorrow go
'I think that you 'll go tomorrow.'
c. Kvinden dan die boeken te diere zyn.
I-find that-PL the books too expensive are
'I find those books too expensive.'

(1)は西フラマン語の例文であるが、補文標識 that がそれに続く従属文の主語と一致しているとともに、その従属文の主語は動詞 go と一致している。こうした現象がヨーロッパの複数の言語で起きていることが観察さ

² Barbiers (2012)、Poletto (2000)、Carstens (2003) など参照。

れ、分析されている。

日本語においても方言変異と統語構造との関係がある。Maeda and Takahashi (2013)は長崎方言と標準日本語の N' -Ellipsis を比較し、前者では pro form が出現するのに対し、後者では N' -Ellipsis が可能である事実を DP 内部の構造によって統一的に説明している³。このことは Saito and Murasugi (1990)の N' -Ellipsis 分析と矛盾するものではないとも言及している。

また Saito (1984)、Fukuda (2000)では補文標識と方言変異との関係が議論されている。Saito は次のような標準日本語と神戸方言とのコントラストに注目している。

- (2) a. Mary-ga kinoo John-ni Kobe-ni iku to itta (koto)
b. *Mary-ga kinoo John-ni Kobe-ni iku o itta (koto)

Saito は神戸方言では(2b)のように補文標識をゼロ表示する文も文法的であると指摘している。

- (3) a. Mary-ga kinoo John-ni Kobe-ni iku te yuuteta (koto)
b. Mary-ga kinoo John-ni Kobe-ni iku o yuuteta (koto)

Saito (1984): 412

しかし埋め込み文である Kobe-ni iku をかきまぜ規則によって前置すると補文標識を削除できない。

- (4) a. Mary-ga kinoo Kobe-ni iku te John-ni yuuteta (koto)
b. *Mary-ga kinoo Kobe-ni iku o John-ni yuuteta (koto)

Saito (1984): 412

さらに Fukuda (2000)は広島方言では(5b)のような補文標識の削除も可能だということを指摘している。

- (5) a. Omae sensei-ni Taroo-ga manuke ja yuuta rooga.
You teacher-to Taroo-NOM stupid be said don't you
b. Omae Taroo-ga manuke ja sensei-ni yuuta rooga.

Fukuda (2000): 41

(5a)、(5b)ともに補文標識は現れていないが、どちらも許容文である。

³ N'-Ellipsis については Jackendoff (1971)などを参照。

このことは方言変異と補文標識のあいだに統語的關係が存在しうることを示しているといえよう。ゲルマン語のように主語と補文標識とのあいだに -feature の一致は見られないが、補文標識の削除が可能かどうかという変異が見られる。

また N' -Ellipsis に関しても、pro-form を要求する方言と Deletion が可能な方言とのあいだに Parametric な変異が存在する可能性がある。

2. 実証研究

本研究では当初実証研究の対象として東北地方大舟渡市を中心に使われている「ケセン語」をあつかう予定であった。そのおもな理由は「ケセン語」が山浦(2007)によって詳細に記述されていたからだった。しかし 2011年の東日本大震災によって現地在が壊滅的に被災し、復興までの期間、現地調査が難しい事態となり、対象地域を変更せざるを得ない状況となった。そのため、方言調査の地域を奄美大島の喜界島に変更し、2014年9月に現地調査をおこなった。

2.1. 補文標識

喜界語では補文標識の削除は認められなかった。

- (6) a. ?un mitɕije hirusa nentantei ?umujui.
this road-Top wide not was-that think
I think that this road was not wide.
b. *?un mitɕije hirusa nentan-ø ?umujui.
Honda and Imanishi (in press): (9)

これは喜界語が神戸あるいは広島と違い、東京型のパターンを示しているといった方がよいだろう。しかしこの補文標識パターンと動詞語尾の形態素の関係については十分なデータを集めることができなかった。

2.2. N' - Deletion

N' -Deletion が喜界語では不可能なことはすでに木部他(2011)の報告書でも報告されている。今回は下地(2011)のデータを確認する形式でインフォーマントの判断を得た。

- (7) a. ?un hasaga wa: munda.
that umbrella my one-is
'That umbrella is mine.'
Shimoji (2011): 0771
b. *?un hasaga wa: ø-ɕa.

喜界語では N' -Deletion は許されない。これは上で述べた長崎方言と同じである。

2.3. 格

格に関しては喜界語は興味深いパターンを示す。対格に関してはゼロ格と-joba 格が交代する。主格は-ga 格を示す。属格は-nu という形態素が名詞句に付加される。通常、主格に-nu が使われることはない。

- (8) a. kuruma-ga/*nu tɕa:riti.
car-Nom/Gen disappeared
'The car disappeared'
b. tama-ga/*nu ma:tiɕi.
ball-Nom/Gen rolled.down
'The ball rolled down.'
Honda and Imanishi (2015): (18)

しかし次のような例では-nu が主格として現れる。

- (9) ʔami-nu ɕuttuŋdo:
rain-Gen is.raining
'It is raining.'
Honda and Imanishi (2015): (18)

この交代についてはまだ研究を進めなければいけないが、今後さらに精緻な研究をおこなう予定である。

また対格の-joba についてもまだ詳細なメカニズムはわかっていない。今後に向けた研究の中で明らかにして行く。

参考文献

徳川宗賢、平井昌夫編(1969)『方言研究のすべて』東京:至文堂

徳川宗賢、W・グローターズ(1976)『方言地理学図集』東京:秋山書店

Aldridge, E. (2015) 「上代日本語における疑問詞の位置について」国語研プロジェクトレビュー 5(3): 122-134.

Yanagida, Y. and J. Whitman. (2009). Alignment and Word Order in Old Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 18:101-144.

金水敏(2005)「古代・中世の「をり」と文体」『築島裕博士傘寿記念 国語学論集』築島裕博士傘寿記念会 東京:汲古書院

Barbiers, S. (2012). Where is syntactic variation? Manuscript. Meertens Institute. Amsterdam.

山浦玄嗣(2000)『ケセン語大辞典』無明舎出版

山浦玄嗣(2007)『ケセン語の世界』東京:明治書院

Carstens, V. (2003). "Rethinking Complementizer Agreement: Agree with a Case-Checked Goal." *Linguistic Inquiry* 34(3): 393-412.

Poletto, C. (2000). *The Higher Functional Field: Evidence from Northern Italian Dialects*. New York, Oxford University Press.

Fukuda, M. (2000). "Complementizer drop and IP-complementation in Japanese." J. Kyle and S. Stowers. Eds. *Kansas Working Papers in Linguistics*. 25: 1-16.

Jackendoff, R. 1971. Gapping and related rules. *Linguistic Inquiry* 2: 21-35.

Saito, M. and K. Murasugi. 1990. N' -deletion in Japanese: A Preliminary Study. *Japanese/Korean Linguistics* 1: 285-301.

Maeda, M. and D. Takahashi (2013). NP-ellip' is in the Nagasaki Dialect of Japanese. Presented at Japanese/Korean Linguistics 23 (MIT).

Saito, M. (1984). "On the definition of c-command and government." *NELS* 14: 402-417.

Honda, M. and Y. Imanishi (2015). The syntax of Kikai. *Journal of Policy Studies*. Vol. 50. Kwansei Gakuin University.

木部暢子・窪園晴夫・下地賀代子・ローレンスウェイン・松森晶子・竹田晃子(2011)『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究:喜界島方言調査報告書』国立国語研究所

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 1 件)

1. Honda, M. and Y. Imanishi. (in press). The Syntax of Kikai. *Journal of Policy Studies*. No. 50. Kwansei Gakuin University.

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6. 研究組織

(1)研究代表者

本田 盛 (HONDA, Masaru)

関西学院大学・総合政策学部・教授

研究者番号: 30132319

(3)連携研究者

今西 祐介 (IMANISHI, Yusuke)

関西学院大学・総合政策学部・助教

研究者番号：80734011